

コスモス 47

第 4 次
1984. 12

■ 詩 ■

西 杉夫	5	高島 洋	18	伊藤 正斉	31
浜川 弥	6	本田 晴光	20	申 有人	32
仙石まこと	7	山野 チエ	21	向井 孝	34
押切 順三	8	近藤 計三	22	坂上 清	36
寺島 珠雄	9	野口 清子	27	暮尾 淳	37
千早耿一郎	10	宮田 正平	28	長谷川七郎	48
のまけいこ	11	木原 実	29		
緒方 宗平	17	河合 俊郎	30		

農村観察者・渡部信義

西 杉夫 38

●詩集評

秋山清自選詩集を記録する

押切 順三 23

●はなしの自由席

作品「長靴」と現物の長靴

寺島 珠雄 12

遙かなる原景

申 有人 14

コスモス雑記 2～4

木原 実・近藤 計三・和田 英子・のまけいこ・緒方 宗平

コスモス 第17号（通巻86号）

定価
五〇〇円

コスモス 雑誌

爛熟

木原 実

からだが思うようにうごかず、言葉もあいかわらず不自由となると、ついあれこれとよけいなことをかんがえる。

最近も世間でやかましいグリコ森永脅迫事件のニュースをきいて、つくづく日本も資本主義の爛熟期にはいつているんだなあと思ったりした。

どことなくヒマな、天下太平な事件で、あれこれといわれるが、この事件のアクレス腱は意外なほど簡単なところにある。派手な食品流通業界にあって、実力もトップクラスのメーカーやスーパーが、指一本ほどの操作でひん死の打撃をうける。そしてこのさい、企業の市場独占のアミの目が大きく張

られておればおるほど打撃は大きいというのであるから、資本主義企業の何ともモロイことよ。

体制に反対し、反対することによって体制そのものの発展をたすけてきたような、つまり体制の否定的媒介に終止したようなキライのあるわが生涯の運動も、思えばいささはかなかったような気がする。

資本主義の爛熟期に生きて、多彩で豊かな表現がでてくることはいいことだが、そのなかで一つや二つは、爛熟資本主義社会のアクレス腱に迫る表現があつてもいいんだが、とそんなことまで考えた。ぼくたちが昔から詩とよんでとりつてきた表現は、ほんとうはそのアクレス腱に迫る表現であつたはずだが。近ごろの詩は怪人ナン面相ほどの迫力もないとは情けない。

あと何年生きられるか知らないが、これからさきぼくたちの生きる時代は、どうやら二十世紀の世紀末で、資本主義の爛熟の季節ということになる。

どんな詩をかくて爛熟の世紀末

を生きるか、と考えかけて、アホらしくなつてやめた。
今日は秋晴れのめずらしく美しい日だ。庭の小菊の蕾の色あいがととのつてきて、二三輪ずつひらいた花よりもそれが美しくみえる。こんな日には、動かぬからだのこともつい忘れてすこすひとときがある。

詩を書く怖さ

近藤 計三

いつも詩を書きたいな、と思いつながらも、なかなかまとまらないで途中から投げだしてしまう。つまり、自分の心のなかで発酵してくるものがないのである。いや衝撃を意識するものなら、あり余るほどにあるのだが、それはいつも散文的な感覚でありすぎる。プレヒトではないが、抒情詩の書きづらい時代を改めて意識したり、また島崎藤村や長塚節でもよい、詩の型式をはみ出して散文へと拡がった時代ということを思つてみた

りするのである。

先日、長塚節の「土」について話したら、若い学生たちはそんな貧農の生活なんか自分と関係ないような無関心さでだべつていたので、ちょうど大学祭のテーマが「世界の飢えた人々を救え」といったスローガンをかかっていたこともあつて、こうした歴史もしらないで世界の人々を救えなんて、しよせん偽善的行為だと糾弾したらやつと静かになった。ある大学では一年間で倉庫がいっぱいになるくらいに上衣やシャツの忘れもの、というより学生が放置していくというぐういだから、ちやちな同情なんかで正義ぶられては腹に据えかねる思いであつた。

ところが、さらにアツといわされたのは、授業が終つたあと、学生の一人が追つかけてきて、ぜひ「土」を読んでみたいといつてきたのはよかつたのだが、次いで曰くに、その本を貸してほしいという虫のよい申し出だつたのにはガツクリときた。文庫版の紹介までしておいたのだが、買う気はサラ

サラないのである。

これが他人の話なら、またもう少し客体化して考えられるのだろうが、こゝ自分の直接的な衝撃的体験では、どうしても散文的な反応が先行してしまつて、つい逆上してしまうのである。

おおかた毎日といつていいほどこんなことの繰返ししていると、ふと詩的な感情が自分の逃避港になつてはしないかという反省すらするのである。そして詩を書く怖さを感じたりする。

奥付けのこと

和田 英子

十月の中旬、詩集「単線の周辺」が出来上つたが、いまひとつ気分が乗らなかつた。理由は奥付けに印刷した転居先を抹消しなければならぬことである。

詩集を編集し終えたときは、たしかに十一月二四日に転居する予定であつた。

九月十日に公団の出張所に申込

金を添えて、ニュータウンのマンションの二階の東角を予約した。

丘陵地に建つたマンションの、これから住むべき部屋の窓からむこうを眺めると、駅のすぐ裏に占めた大スーパーの商標が、いやおうなく目に入ってくる。下方は、てんとう虫や、かぶと虫のような乗用車が限りなく並ぶ駐車場であり、はるかむこうは谷をへだてた団地の、家、家、家がぎつしり丘の上までつづいていく。その上はさえないものない青い空。雲が視野ひろく左から右へ動いている。

「夜になると灯がきれいですよ」案内の女の人が言つたとき、旅行先のホテルの窓から見る山に近い観光地の夜の光景が頭をよぎり、ふいに心細さをおぼえた。

道路は立体化して、自動車道を横ぎれば近道なのに、歩道橋にのぼり大まわりをして行かねば団地の入口に近づけぬ。

「よく住んで、五・六年のところだろう。きつといやになるに違いない。冬になると北風にふきとばされそうだ」などと思うと、いま

住んでいる家を手離すのが惜しくなつた。

「家を売るのはやめて、賃貸にします」と仲介の人に告げ、少し心が安まつた。彼岸が過ぎて、お寺さんがやつて来た。「この家を買すことにしました」と言うと、この家が気に入っている和尚は、とうとうと反対をはじめた。自身の体験から、「マンションのスラム化」「貸せば出て貰うのに莫大な金がいる」と、玄関を出る際まで説教をして帰つて行つた。

玄関から次の間仕切の白いドア、半月型の出窓、広すぎる空が見える予約マンションとの距離は急速に遠のいて行つた。

家に移る機運は今年はじめ頃からずつと続いて、時間、気分がそのために使われ、頂く詩集の返事も出来ず、詩も雑なことですませてしまつて忙しく暮してきた。

みじかい時間で納めた詩集を、すばやく印刷、出版して下さつた三宅武さんにも、転居先を消す、ということとは心苦しい。

でも、そのままにすることは出来ない。心を決めて、サインペンで消すことにした。

先日、小島輝正さんの会合のとき「あれは、どういうことですか」と擲論され、池田昌夫さんは「先程出版した本を送りたいのですが住所はどこへ送ればいいのかですか」と電話をかけてたされた。

マンションは解約届を出し、申込のとき貰つた「高価な」シャープペンシルは書き心持はいい。

さらりと

のまけいこ

子ども達が、成長してゆくことを、親はさみしいと思う事がある。けれど、さみしい事ではない。よくよく思つて振り返ると我が若かりし頃そのままだと、思わず頬をゆるませてしまう。親から離れた子の方は、親心というやつが、うつとおしいのに違いない。過ぎてみれば、その情に気付くのだが、子にはまだ通じない。親に成らな

ければ解らない気持。

「むかし古寺に和尚さんと一匹の猫が、仲良く住んでおった……」
遠い日のおはなしがこの頃よく想い出される。

「和尚さんのころもが、汚れている。きのう法事もなし、葬式だったのに、裾の方が湿っていたり、泥がついていたりする日が続いた。ある晩、猫がこっそり夜中に起きあがり、和尚さんのころもを、ひよいと被って、寺を出て行くのを知った。ああ、とうとうお前もそんなに成ったか。あくる朝、和尚さんは、猫に赤飯を炊いて、もうお前とこの寺で一緒に暮らせなかつた。とやさしく背中をなでた。猫は寺を出て行った。

猫の尻尾は、二つに割れ、ねこまたに成ったからだよ。」と。

子どもの私には、どうしてねこまたに成ったら寺で暮せないのか不思議だったが、今思うと、何となく別れの潮どきを表現した事だろうと思う。ねこまたに成ったのは猫の、成長した姿ともとれる。和尚さんのころもを被って、一人

前、いや一猫前になった猫と、親を一枚づつ捨てようと抗う息子の姿が、ユーモラスに重なる。「お前もねこまたか。」

自立する。と言えばカッコ良いが、放り出す。出て行く。「一人で食べていきな」と、言う方が当っている。

理屈ではないとも思う。生きものの因果と言うか、動物みな同じだよ。と和尚さんが教えている。その時が来たら、さらりと息子を送り出そう。その先はそれぞれの道。いつかつながらそれぞれの道を、私はさらりとした姿勢で行かなければならない。

あいた口が

緒方宗平

今年の夏は前半雨がおおくてそのうでもなかつたが、後半は日照りがつづき、その分だけ暑かつた。そして夏は飲みものの季節でもあった。殊に大人たちにとってはビールの欲しい季節で、女の人も飲

むようになつて最近の売ゆきは年毎に何%とか伸びた。ところが今年はそのうはいかなかつたと、大蔵省が発表した。ビールの売上げは天候に左右される。しかし前にも述べたように、今年の天候の具合はそれで売上げが伸びぬということとは関係がなかつた。政府、大蔵省は酒税法の改正をして酒類、この場合ビールの値上げが殊にひどかつた。ひどすぎた。それが売上げの伸びなかつた最大の原因ではないか。たとえば天に向つて吐いた唾が本人の顔に落ちかかつてくるようなものではないか。もと

とは政府、大蔵省にないとはいえない。何せ大瓶一本二六五円だったものが、三一〇円にはねあがつた。これではたまつたものではない。それでは飲む方としては湯上りの一ぱいも、そのうまさも、たのしみさえもが半減する。勿論ビールが三一〇円になろうが、五〇〇円になろうが、こたえぬ人たちのことは別だが、大方はこたえらとおもう。今は飲めないが前には飲んでいたので湯上りの一ぱい、

汗を流したあとの一ぱいのうまさは格別で、それが他を思うことなしに飲めないということの味気なさ、やるせなさ、といったものを思わずにはいられない。

大蔵省では値上げにより、三千二百億円の増収を見込んでいたものが、一千億円の減収になるというから、舌打ち位しただろうが、してやったりと手を叩きたい思いが私のなかにはあつた。そこには意識するとしなやかにかかわらず、すくなくとも胸に詰っていたものもやしたものが二千億円のなかにはいつていたとおもう。

そこで聞きかじりの、それ故での、いささか戸惑いを感じながら、この場合びつたりの大阪弁をおもいだす。わいら馬鹿にしたらかんで。ところで十月二十三日の新聞によると、酒税増税見送りというのがあつた。六〇年度の税制改正で大蔵省は酒税の増税を見送る方針であるとしてあつた。二年連続の増税は酒業界や消費者に大きな負担を強いるからともしてあつた。あいた口がふさがらぬ。

変型

西 杉 夫

手はただ水をひっぱたくのだ、
足はやたらとつっぱるのだ、
右に曲り 左に曲り

男はよたよたと進んでいく、
おれののんびりした平泳ぎよりもさらにおそく、
どちらかといえばクロールだが
あまりにくずれている。

ばらばらな手足で
もがきにもがいて
やとむこう側へたどりつくこと
うすい胸で大きく息をする。

右腕にひきつれた傷あとがある、
腹はやや出ている、
三〇才はこえているか。

びつしよりの顔をぬぐう間もなく

また水をたたきはじめる。

水深二メートルをこえる

競泳用プールのどまんなかに

こんな男はほかにはいない。

驚きとさげすみ

ささやかかわすの味があるが、

男にきこえるはずもない。

ぶつかって はねかえされ

だがひたすら前を目ざすのだ、

ひとときわ高い水しぶきが

その位置を示している。

ときどきあがる顔は

ちょっと肩でもたたいてやりたいまじめさだ。

どこかの小企業の

きまりきった仕事におおいかぶさって

たえず目を動かしている。

その男がいま思いきり水をたたき、

手足をひろげる。

泳ぎを教えてください家族がいなかった、
かっこうのわるさをいって、くれる仲間がいなかつた。

我流がいく、
全力をあげて

たったひとりで水に挑戦している。

孤独な友よ、

見かけなくなつて三月になるか。

貯水ダムにて

浜川 弥

紅葉は

樹木たちの裸身への羞恥ではなく

スズメバチに刺されたように

赤くただれて点点とあるのは

やがて展延してゆく病根
季節の痛み

汚れて干からびた貯水ダムに風もなく

ボソボソと

そぐわないこれっぽしの

初秋の雨に濡れて

むきだされた湖底の枯骨の林

湖水におとす影もない

ジイチャン ナンデ水ナインヤ

雨ガヨウケ降ランカラヤ

ソレヤッタラ水道ノ水汲ンデ入レタラエエヤンカ

台所に 風呂に 公園に

ふんだんにあふれ出る水を

なぜ入れてやらないか

満満と水のあるダムにしてやれないか

私は三才と四才の孫に答えねばならない

告知

仙石まこと

告げられる虚偽

失語のやすらかさ

草原で花を一本持つて立っている

小さな女の子

(その日霧ヶ峰は一面の青空で)

今は秋

だが地下室では青空は見えない

快い群衆の中の孤独

私は革命家のEを思い出す

おお 三十年前のエルヴィス

焼けた砂で足の裏が熱い

白い燈台と新宿・風月堂

「アナタ イマ ナニ カンガエテマスカ」

「別に」

私がヒッピーからの転向なら

きみは日本浪漫派への転向だ

* * *

四十一歳の二人が新宿の歩行者天国を歩く
ルサンチマンが目にあられる

Oと私は人ごみをかきわけ

紀伊国屋書店のラッシュの中にもぎれこむ

「人は群れたがるものさ」

『ユングとシュタイナー』だって！

健さんなら「まがまがしい」って言うだろううか

玄米のふりかけを食べている私は

若者たちの目をにらみつける

「ごめん 今日は ウツなんです」

侵略は常に行われている

日々均衡は保たれなければならない

幻想をそごとした私にとって

谷川雁など眼中にあるわけがない

祭りあそび

押切順三

のろしが上がる、
いいお天気で
大成功だ、
連合青年会会長が扮する軍将が
盃を投げて勝ちどき、
いざ出陣、城下へ
すっかりその気になって
足踏みし、刀を抜いたりで、――
まず武者が行く、
つづいて女子なぎなた隊
髪を梳いて鉢巻、大なぎなたをふるって演武
白たびにわらじがけ、城を守るは女の務め、
稚児行列にちびっこ剣道隊、

にぎにぎしく天神ばやし港ばやし、――
建都三百八十年という。
ぞろぞろと、さむらいたちがやって来て、
城を築く、それからの長い時間。
今日は、さむらいのふりをしてあそぶ、
よろい、かぶと、具足をつける
采配をふるう。
兵卒、旗もち、さむらい、大将、とのさま
そんな隊列に
人はついて回る、
道に溢れ、人の群れは街角を曲がる。
――むかし、ここに秋田歩兵第十七聯隊があつて、
停車場方面から広小路へと来た行列は聯隊営門
前でわつと湧いて……そんなに古いことでもな
いが、――
今日は、よろいかぶとのさむらいの
祭りがあつて人が群れて、
道は次第に狭くなる。
ここは広場、

あたりを見回して床几に腰を下ろす
だんだん、真似ごとがうまくなる
真似ごとの栄光が好きになる、
下知するあそびの楽しみ。

――秋田鎧武者まつり

八月三十一日の富士山

寺島珠雄

――ただいま左手に富士山が見えております

アナウンスに目をさます。
新大阪を朝発^だちの東京行新幹線。
見たくもないけれど
生憎 左窓際席におれはいるのだ。
視線をやって

へ――と思った。
ほ だったかもしれない。
富士山はあおぐろくそこにあった。
富士山じゃなくて
晴天にあいた大洞窟の入り口だ。
富士山については二つ
回想する定型があるのに
それが出洪って別のことを考えた。
空という幔幕の裾が左右にしばらくはられている。
テント張り見世物小屋が覗けと誘う客寄せに似た
具合。

ひろがった下部は少うし明るく
上になるほど闇めいて
てっぺんは絵のようでなく
やや右傾きだと思っっているうちに
富士山を過ぎた。

盆踊りの町

千早耿一郎

久しぶりに郡上八幡に行った
町はずれの分教場にぼくはかよったことがある
いまその跡もなく 麦の穂が波打っていた
町に溢れていた木材のかおりもない
街なかを魂が流れていると思ったことがある
その水だけが清冽だった

あの頃ひっそりと盆踊りが踊られていた
悲しい歌だと思った
宝暦の蜂起三千名 刑死十三名 牢死十六名
以来夏になると人々はみな
拳を揮い足で地面を蹴って踊った
街をとり巻く山々から悲しみというものが
ほとんど垂直に降りてきて

その暗い踊りの輪を浸した

いま四つ辻のまんなかに屋台が輝く
太鼓がとどろき 三味線が鳴り
歌の言葉は豊饒な果実となって弾けとぶ
そのまわりに湧きたつ陽気で無邪気な人間の林
そよぎ波だち伸び縮みときに崩れ
四つの道のそれぞれに溢れ出る
ぼくもまたはなやかな渦に巻きこまれ
一本の道を遠ざかっていった
ゆく先にひめやかな闇が息づいていた
その暗黒のなかへぼくは踊りこんでいった
暗さのなかでひっそりと踊る一団があった
もはや太鼓の音も歌声もきこえない
だのにもう何十年もかれらは踊っているかのようだ
いくつかの少年の顔があった
そうか 戦いで死んだやつらだ
毎年夏になるとこの町へ帰ってくるのだ

分教場の生徒に戻って
ぼくもまた死んだのだ ぼくの知らないうちに
ぼくもまた少年となり
その暗い踊りの輪のなかに消えていった

家族

のまけいこ

むせかえる人間のおい
ぬくもりが
ほどけて
たいらに 溜る。

汚れたカラーに
己を閉じ込め だまる夫。
踵ばかりうすい靴下は息子
抗い、ころび、
踏ん張っているか。

大胆に装い
未熟さに
はらはらせる娘も

家族たちが
「生業」をさらけ出し
生きている。
それぞれに
汚れている。

何もかも、
流すといい。

洗ったら
少しは軽く成るでしょう。
私の鎖もほどくから
ちよっぴり
自由に なりなさい。